

「ライティング」から「英語表現」：POLESTAR Writing Course から BIG DIPPER English Expression の改訂まで

南出 康世

1. POLESTAR Writing Course

1989年告示の高等学校学習指導要領に「英語IIC」に代わって「ライティング」が登場した。これを受けて新しい編集チームが編成された。これまでの「英語IIC」は受信知識の教授に主眼が置かれていたので、文法や文型を順次体系的に学習するには向いていたが、言語の発信場面を考慮した「発話行為」の面や「概念表出」の面はあまり考慮されていなかった。このことを鑑みて、D. A. Wilkinsらが提唱した「概念シラバス」(notional syllabus)、「機能シラバス」(functional syllabus)を研究し、Communicative Language Teaching (CLT)を核とするライティング教科書 *POLESTAR Writing Course* を編集した。日本における英語教育という特殊性を考え、まず「はじめに」として、「英語の発想と日本語の発想」というセクションを設け、Part I「表現別」(表現のための文法)、Part II「機能別」(文法をいかに機能にいかすか)、Part III「パラグラフライティング」(文を超えた文法)の3部構成とした。この構成は斬新で、「コミュニケーションのためのライティング」「文法から談話文法への発展」という理念を具現化したものとして高く評価され、ライティング教科書のモデルになった。

1999年の高等学校学習指導要領の改訂にともなう新版でも、「はじめに」(英語の発想と日本語の発想)、Part I「発信型ライティングのための構文と表現」、Part II「インタラクティブに書くための機能表現」、Part III「パラグラフライティング」という3部構成にし、内容をますます充実させた。

2. BIG DIPPER English Expression I & II

2009年には高等学校学習指導要領は大改訂され、「ライティング」は「オーラルコミュニケーションI & II」と合体して「英語表現I & II」となった。我々編集チームは *POLESTAR Writing Course* から *BIG DIPPER English Expression I & II* へと

移行した。「コミュニケーションの手段」としての「書く」「話す」を重点的に扱い、*BIG DIPPER English Expression I* では Part I「コミュニケーションのための文法(communicative grammar)」, Part II「コミュニケーション機能(communicative function)」を中心とした2部構成とし、「書く」「話す」の発信能力を育成することを主眼とし、同時に「読む」「聞く」の受信能力にも有機的に関連する練習問題を随所に設け、最終的には学習者がコミュニケーション時代に必要とされる総合的な伝達能力を習得できるよう工夫した。*BIG DIPPER English Expression II* では Part I & II の学習レベルを上げ、Part IIIとして「プレゼンテーション・ディスカッション・ディベート」を加えた。

3. BIG DIPPER English Expression I & II の改訂

今回の改訂においても、これまでの方針を維持し基本的な構成を踏襲したが、初版を細部にわたって精査し、「現場の声」に基づき、文法事項の記述・練習問題をさらに充実させるなど必要に応じて修正加筆した。執筆者の英語のネイティブスピーカーの一人は、英語文体論・語用論の世界的権威なので、本書の核ともいべき英文(基本例文, model sentence, key expression など)はさらに磨きがかかり、完璧と言っても過言でない域に達した。また「辞書を活用する」などのコラムを新設し、生徒の学習意欲を高める工夫をした。

紙媒体から電子媒体への転換、小学校における英語の教科化、センター入試の廃止とそれに伴う新形式試験の導入など激動の時代である。我々はこの激しい変化に惑わされることなく、将来を見据えて進歩を続けたいと考えている。

(大阪女子大学名誉教授)

Revised BIG DIPPER English Expression I 代表著者